

宿場・丁場と参勤交代

講師：水本 邦彦先生（京都府立大学名誉教授）

令和元年 7月20日（土） 於：草津宿街道交流館

草津の歴史を語るうえで切っても切れない要素のひとつに、この地が江戸時代に栄えた「宿場町」であった、ということがあります。草津は、江戸と京・大阪を結ぶ主要幹線である東海道と中山道が合流・分岐する地点の宿場町として、多くの旅人を受け入れ、送り出していました。



宿内には大名や公家など、身分の高い者しか利用することができない施設である「本陣」が2軒あり、幕末に本陣に宿泊したイギリスの外交官：アーネスト・サトウが、手記『一外交官の見た明治維新』のなかで、「この種のものの中では、私がこれまでに見た最も立派な建物の一つであった」と絶賛するほどでした。

一方で、宿場と宿場をつなぐ街道の管理はどのようになっていたのでしょうか。街道近くの村民には「丁場（町場）」とあって、定められた街道の区間内を公用旅行者などの重要な通行に際し、道路の整地や清掃のほか、盛砂・飾り手桶・水打ち・箒の設置等をするのが命じられていました。草津ではありませんが、江戸時代後期の小田切春江による「琉球画誌」（天保3年（1832））の中で街道を整地している様子が描かれています。

また、これら街道と宿場を大いに活用したのが、江戸と国許を往還する大名の参勤交代でした。峰山藩（現在の京丹後市）6代藩主の京極高久（享保14年（1772）～文化5年（1808））の、参勤交代での道中の記録「峰山藩主参勤交代道中記」が残っており、彼らの旅程を知ることができるほか、草津宿での出来事についても記されています。

講座ではこのように、草津宿の構造・利用と街道の管理、そして参勤交代について、絵図や写真、古文書を用いて先生にお話しいただきました。史料からは当時の宿場や街道の活き活きした様子が伝わり、改めて宿場と街道の歴史を感じることができました。

（文章：草津宿街道交流館）